

さよならを言う前に、もう一度だけ抱いて。

離島フェリー船長・久世湊大と、手術前夜に「生きて帰る」と誓った

碧汐

目次

第1章　冬の港で待つ男　1
第2章　告知　15
第3章　出せなかった手紙　21
第4章　さよならの練習　27
第5章　引き下がる、という嘘　33
第6章　鍵は磨かれている　41
第7章　島の子どもの絵　47
第8章　隠しごとの終わり　55
第9章　選び直す夜　67

第1章　冬の港で待つ男

久世湊大は、三十五歳だった。

瀬戸内の小さな島と本土を結ぶフェリーの船長として、彼は毎朝五時二十分に港へ出た。始発は六時十分。冬の港はまだ暗く、海は黒に近い群青で、桟橋の蛍光灯だけが白く瞬いていた。制服の上着のボタンを留める指はかじかんでいたが、湊大の動作に迷いはなかった。出航前の点検、機関の音、係留ロープの張り、客室の暖房、車両甲板の凍結。十五年、この航路で働いてきた男の朝は、いつも同じ順序で始まった。

――はずだった。その朝だけは、順序が一つ狂っていた。

「船長、今日、顔が怖いですよ」

二十代の甲板員が、笑いながら言った。湊大は鏡代わりの窓ガラスに映る自分の顔を見た。眉間に、浅く皺が寄っている。

「怖くねえよ」

「いや、怖い。なんか、怒ってるみたい」

「怒ってねえ」

怒ってはいなかった。待っていたのだ。

六時十分の始発で本土へ渡り、夕方の最終便で島へ戻るはずの女が、昨夜から帰ってきていない。正確には、帰れない、と短い連絡が来たきりだった。

『ごめん、検査が長引いて、今日は本土に泊まる。明日の昼便で帰るね』

高梨冬花、二十七歳。島の診療所に併設された小児病棟で働く保育士で、湊大とは二年付き合っている。島の人間は全員、二人がいずれ結婚するものだと思っていた。本人たちも、どこかでそう思っていた。思っていたからこ

そ、わざわざ言葉にして確かめることを、先延ばしにしてきた。

昼便は、十二時四十分に着く。

点検を終えた湊大は、船橋で海を見ていた。冬の凪いだ海は穏やかで、対岸の山並みが薄く霞んでいた。こんな海の日は、船乗りには退屈で、島の人間にはありがたい。だが湊大の胸は、凪いでいなかった。

冬花の声を、昨夜の電話で思い出す。明るく振る舞おうとして、わずかに上ずった声。冬花は嘘が下手だった。隠しごとがあると、決まって語尾が速くなる。付き合って二年、湊大はその癖を、彼女の指の癖よりもよく知っていた。

「……何を隠してる」

呟きは、誰にも届かず海風に消えた。

昼。フェリーが桟橋に近づくと、湊大は無意識に客の流れへ目を走らせた。

観光客の団体、買い物袋を提げた島の老人たち、部活帰りの中学生。その最後尾に、小さなボストンバッグを持った冬花がいた。

白いコート。マフラーを顎まで引き上げ、栗色の髪を風に乱して、彼女はゆっくりとタラップを下りてきた。顔色は悪かった。だが、湊大と目が合うと、彼女は無理に笑って、手を振った。

その笑い方を見た瞬間、湊大の胸のざわつきは、確信に近いものに変わった。何かがある。しかも、彼女はそれを、一人で抱えて帰ってきた。

「おかえり」

「ただいま」

荷物を受け取ると、冬花の指は冷え切っていた。湊大は何も聞かず、その手を自分のコートのポケットへ入れた。島の港で、こういうことをしても誰も咎めない。二年の歳月が、二人の距離を島の日常に溶かしていた。

「検査、どうだった」
「ん……まあ、色々。あとで話す」
あとで。その言葉が、こんなに遠い響きを持つのだと、湊大は初めて知った。
その日の夜、冬花の部屋で夕食を食べた。島の冬花の部屋は、診療所の職員宿舎の一角で、六畳一間に小さなキッチンが付いていた。冬花は大根と鶏の煮物を作り、湊大は本土で買ってきた彼女の好きな菓子を出した。いつもどおりの夜。いつもどおりでない沈黙が、箸の音の合間に落ちた。
「冬花」
「ん？」
「無理すんなよ」
「……してないよ」

冬花は笑って、立ち上がり、流しへ食器を運んだ。水の音がする。湊大はその背中を見ていた。細い背中だった。抱き締めれば、自分の腕の中にすっぽりと収まってしまう、細さだった。

流しから戻らない冬花の肩が、小さく震えた気がして、湊大は立ち上がった。背後から近づき、声をかけるより先に、彼女の肩へそっと手を置いた。

「冬花」

振り返った顔には、涙はなかった。ただ、堪えている人の顔があった。湊大は、それ以上何も聞かなかった。聞く代わりに、彼は冬花を抱き締めた。強くではなく、逃げ場を残して。いつもそうしてきた。冬花が言葉にできない夜は、まず体温で、それからゆっくりとほどいていくのが、二人のやり方だった。

「……湊大は、ずるい」

「なんでだ」
「聞かないところが。聞いてくれたら、嘘つけるのに」
湊大の腕の中で、冬花は小さく笑った。笑いながら、その声は震えていた。
「嘘つかなくていい。言いたくなったらでいい」
「……うん」
その夜、二人は一緒に眠った。冬花の部屋の小さなベッドは、二人で寝ると身動きが取れない。いつもは文句を言い合って笑う狭さが、その夜はありがたかった。離れずに済むから。
眠りかけた頃、冬花の手が、湊大のシャツの上から、そっと腹へ触れた。遠慮がちに、確かめるように。
「冬花？」
「……いい？」

聞くのはいつも彼女の役目で、頷くのは彼だった。湊大は答える代わりに、冬花の手を取って自分の胸へ導いた。鼓動が、手のひらに伝わる速さで打っていた。

「俺はいつも、だ」

「子どもみたい」

「三十五にもなって、好きな女の前じゃ、こんなもんだ」

冬花は笑って、湊大の首へ腕を回した。キスは、最初は触れるだけだった。彼女の唇はまだ少し冷たくて、湊大は自分の熱で温めるように、何度も軽く口づけた。そのたびに冬花の指が、彼の背中を掴む力が強くなっていく。求められている、という感覚は、男をどこまでも愚かにする。湊大は冬花のセーターの裾へ手を滑らせ、素肌の腰に触れた。彼女は小さく息を呑んで、けれど逃げなかった。むしろ自分から身を寄せてきた。

「今日は……私から、していい？」
「ああ」
冬花の手が、震えながらシャツのボタンを外していく。一つ外すたび、彼女は湊大の顔を見た。確かめるような目だった。いつもよりずっと必死な目だった。その理由を、湊大はまだ知らない。知らないまま、彼はその必死さを、愛しさとして受け止めた。
やがて二人は、狭いベッドの上で互いの体温だけになった。冬花の肌は白く、鎖骨から胸にかけての線を、湊大は何度見ても見飽きることがなかった。彼は冬花の胸へ唇を寄せ、ゆっくりと舌で転がすように愛撫した。冬花の喉から、堪えきれない声が漏れる。
「あ……っ、湊大……」
「声、我慢しなくていい。宿舎の壁、厚い」

「うそ、薄い……んっ」

笑い混じりの抗議は、すぐに甘い声に変わった。湊大の手が太腿の内側を撫で上げると、冬花の体は素直に反応して震えた。指先が一番敏感な場所へ触れたとき、彼女はすでに濡れていた。湊大はその事実に、胸の奥が熱くなるのを感じた。彼女が自分を求めている証拠は、言葉より雄弁に彼の指へ伝わった。

「冬花、濡れてる」

「……言わないで」

「言わせてくれ。俺で、こうなってくれるのが、一番嬉しい」

冬花の目に、涙が浮かんだ。快感のせいだけではなかったと、後になって湊大は知る。この夜の冬花は、最初から泣きながら求めていたのだ。理由を、まだ彼は知らなかった。

彼は急がなかった。指で焦らすようにゆっくりと彼女を高め、冬花の呼吸が浅く乱れ、腰が彼の手を求めて動き出すまで待った。冬花が小さく首を振って

「もう……」

と訴えたとき、湊大はようやく身を重ねた。

「入れて、いいか」

「うん……早く」

一つになる瞬間、冬花は湊大の背中に爪を立てた。きつく締め付ける内側の感触に、湊大は低く息を吐いた。二年経っても、この瞬間の新鮮さは色褪せなかった。むしろ、積み重ねた時間の分だけ、深くなった。

「冬花……好きだ」

「……私も。私も、すごく……あっ」

言葉は動きの中で途切れ、甘い声に変わった。湊大は冬花の腰を抱え、ゆっくりと、深く、彼女の求めるリズムで動いた。冬花の目は潤んで、彼だけを見ていた。その視線に、湊大の自制は少しずつ削られていく。もっと、という冬花の囁きに、彼は動きを強めた。ベッドが小さく軋み、二人の肌が触れ合う音が、静かな部屋に響いた。

絶頂が近づくにつれ、冬花は湊大の首にしがみついた。

「離さないで……今夜は、離さないで」

「離さねえよ」

彼女が達した瞬間、湊大もまた限界を迎えた。冬花の名を呼びながら、彼は彼女の中で果てた。しばらく、二人は重なったまま動けなかった。汗ばんだ肌と肌の間で、心臓の音だけが重なっていた。

事の後、湊大は冬花を抱いたまま、髪を撫で続けた。冬花はいつもなら、す

ぐに恥ずかしがって布団に潜るのに、その夜は彼の胸に顔を埋めたまま、離れようとしなかった。

「湊大」

「ん」

「約束して。何があっても……」

言いかけて、冬花は口をつぐんだ。湊大は続きを待ったが、彼女は小さく首を振って、もう一度だけ言った。

「……なんでもない。寝よ」

湊大は、無理に聞かなかった。それが間違いだったと知るのは、もう少し先のことだった。

窓の外では、港の汽笛の代わりに、冬の風が防波堤へ当たる音がしていた。島の夜は静かだった。その静けさの中で、冬花は一人、起きていた。湊大の寝

息を聞きながら、彼女は枕元のスマートフォンの画面を、光を落として開いた。

病院の予約票。手術予定日まで、あと四十九日。

画面を伏せて、冬花は湊大の腕の中へ、もう一度身を寄せた。あと四十九日。この体温を、あと何回、こうして確かめられるのだろう。

数えるのは、やめられなかった。

物語を三日戻す。

本土の大学病院の診察室で、高梨冬花は一人、医師の説明を聞いていた。二十七歳。島の小児病棟で子どもたちに

「ふゆ先生」

と呼ばれる彼女が、その日ばかりは、大きな病院の大きな椅子に、小さくなって座っていた。

「高梨さん、検査の結果が出ました」

医師は画像を示しながら、静かに説明を続けた。幼い頃に受けた治療の後遺症による癒着。それ自体は長く経過観察で済んできたものだった。だが今回、右の卵巣にできた嚢腫が大きくなり、癒着も進ん

でいた。放置すれば破裂や捻転の危険がある。再手術が必要だ、と。
「手術は、四十九日後を予定します。年明けのこの日程なら、執刀医の確保もできます」
「……四十九日」
冬花はカレンダーを思い浮かべた。冬が深まり、島が一番寒くなる頃だった。
「それから、これは今のうちにお伝えしておくべきことです」
医師の声が、少しだけ慎重になった。
「右の卵巣は摘出になる見込みです。左側も、過去の治療の影響で機能が低下しています。手術が成功しても、自然に妊娠する可能性は、かなり低くなると考えてください。ゼロとは言いません。ですが、期待を持たせる言い方はできません」

部屋の時計の秒針の音が、やけに大きく聞こえた。

冬花は、すぐに泣かなかった。泣く代わりに、彼女は丁寧に質問をした。手術の所要時間、入院期間、仕事への復帰の目安、島の診療所への連絡は自分でしていいか。保育士として、子どもたちの前から突然消えることだけは避けたかった。そういう現実的なことを聞いている間は、まだ平気だった。

平気でなくなったのは、病院を出て、港へ向かうバスの中だった。

窓の外を、冬の海が流れていく。フェリーの時間が近づいていた。本土の港の待合室では、島へ帰る顔見知りたちが談笑していた。その輪に入る気が起きず、冬花は隅の席でスマートフォンを握り締めていた。

湊大に、何と伝えるか。

久世湊大、三十五歳。島に残ることを自分で選んだ男だった。彼は若い頃、外洋航路の大型船に乗る夢を持っていた。実際に一度、話も来た。それを蹴っ

て島のフェリーに残ったのは、船乗りだった父が倒れた時期と重なったからでもあったが、もう一つ、冬花と出会ったからでもあった。彼はそのことを、一度も恩に着せなかった。

「島の海が好きなだけだ」

と笑うだけだった。

その湊大が、子どもをどう思っているか、冬花は知っていた。

ある夏の日、二人は病棟の子どもたちと一緒に、港で花火を見た。入院が長引いている男の子が、湊大の大きな手にしがみついて離れなかった夜。

「船長さん、また来てね」

「ああ、また船見せてやる」。

その帰り道、湊大はぽつりと言ったのだ。

「俺、自分にガキができたら、ああいうふうに手え繋いでやれるかな」

悪気のない、未来への素朴な期待。冬花はそのとき笑って

「湊大は良いお父さんになるよ」

と答えた。自分も、その未来を疑っていなかったから。

その言葉が、今は刃物のように胸に残っていた。

彼は悪くない。何も悪くない。夢を蹴って島に残った男が、今度は、子どもを持つ未来まで、私のせいで手放すことになる。しかも本人はきっと

「構わない」

と言う。言って、本当に構わないふりをして、一生、どこかで諦め続けるのだ。湊大はそういう男だった。自分の欲しいものを、声に出さない男だった。

それなら、先に身を引くべきなのは、私の方だ。

バスが港に着いたとき、冬花の決意は半分固まっていた。残りの半分は、湊大の顔を見たら崩れることも、分かっていた。だから彼女は、フェリーに

乗らず、本土に一泊した。泣くための一泊だった。ビジネスホテルの小さな部屋で、冬花は声を殺して泣いた。子どもが持てないかもしれないこと自体よりも、湊大に言わなければならないこと、言えば彼が自分を諦める側に回ってしまうこと、その全てが怖かった。

翌朝、鏡の中の目は腫れていた。冷水で顔を洗い、化粧でごまかし、冬花は昼便のフェリーに乗った。タラップの先で、湊大が待っていた。コートのポケットに、彼女の冷えた手を入れてくれた。

何も知らないはずの彼の体温が、その日ほど冬花を泣かせそうになったことはなかった。

島に帰ってからの一週間、冬花は二つの生活を同時に送っていた。

一つは、いつもどおりの生活。病棟で子どもたちと折り紙を折り、点滴の管に気を取られないよう絵本を読み聞かせ、湊大と食事をして、笑って、眠る生活。もう一つは、水面下の生活。手術の説明書を宿舎の机の引き出しの奥に隠し、夜中に本土の病院のサイトで同じ病名の体験記を探し、湊大への別れの言葉を、頭の中で何十通りも組み立てる生活だった。

どちらの生活も、本物だった。だから苦しかった。

言い出せなかった理由は、勇気の不足だけではなかった。言えば終わる。終わらせたくない。まだ四十日以上ある。その言い訳で、一日延

ばしにするたび、冬花は自分を嫌いになった。

ある夜、湊大が夜勤明けで宿舎に泊まった朝、冬花は彼より早く起きて、キッチンで手紙を書き始めた。口で言えないなら、手紙で。そう思って書き始めた便箋は、三枚目で止まった。

『湊大へ。いきなりこんな手紙でごめんなさい。私の体は、子どもの頃の治療のあとが残っていて、今度、大きな手術をすることになりました。手術をしても、元どおりにはなりません。私は、子どもを産むことがたぶんできません』

そこまでは書けた。その先が書けなかった。

『だから』、と書いては消した。『別れてください』と書いては、ペン先で塗り潰した。『あなたの未来を、私に使わないで』と書いたところで、涙が落ちて、文字が滲んだ。

冬花は便箋を丸め、けれど捨てられずに、書き損じのまま、机の引き出しの、手術の説明書の下へ押し込んだ。書き損じの手紙。渡せなかった言葉は、そうして増えていった。二通目、三通目。どの手紙も、最後の一行だけが書けなかった。

その間も、湊大は何も知らないふうに振る舞っていた。

――振る舞っている、と冬花が気づくのは、ずっと後のことである。この頃の湊大は、以前より少しだけよく島の話をした。

「春になったら、船の塗装が入り直す」

「来年度は若いのが一人入るらしい」。

未来の話を、彼はさりげなく増やしていた。冬花はその未来の話のたびに胸が痛み、けれど彼の前では笑った。

金曜日。病棟では、長期入院している七歳の女の子が、退院の日を迎えた。

その子は冬花に、手作りの栞をくれた。画用紙に、フェリーの絵が描いてあった。窓の一つ一つに、笑顔が描かれていた。

「ふゆ先生、これ、船長さんとふゆ先生」

「ありがとう。大事にするね」

子どもの無邪気な絵が、冬花の決意をまた揺らした。こんなふうに、島の全員が二人を

「そういうもの」

として見ている。別れることは、二人だけの問題では済まない。それでも、と冬花は思った。それでも、彼の未来の方が大事だった。

その夜、冬花は湊大の部屋を訪ねた。彼の部屋は港の近くの古い一軒家で、船乗りらしい無骨な家具と、やけに整った本棚があった。本棚の一角には、冬花が貸した絵本が並んでいた。病棟の子どもたちに読むための本を、彼は

何度も練習で読まされていたのだ。不器用な読み方を思い出して、冬花は笑いそうになり、泣きそうになった。

「湊大」

「ん」

「今度の日曜、船が休みの日。話がある」

湊大は、テレビを消した。画面の光が消え、部屋が静かになった。

「分かった」

それだけだった。彼は何の話か聞かなかった。聞かない男だった。その沈黙が、冬花にはいつも救いであり、今夜は針だった。

帰り際、玄関で靴を履く冬花に、湊大が言った。

「冬花。日曜、寒くなるらしい。港で話すなら、防寒していけよ」

「……うん」

彼は、何かを知っているような顔ではなかった。けれど何も知らない人の顔でもなかった、と冬花は後で思い返す。人は、決定的な場面の相手の顔を、後からいくらでも読み直してしまう。

日曜日まで、あと二日。手術まで、あと四十一日だった。

第4章　さよならの練習

日曜日の港は、休航日の静けさに包まれていた。

停泊したフェリーは、エンジンを止めるとただの大きな鉄の塊に見えた。冬花は防波堤の付け根のベンチに座り、湊大の到着を待った。膝の上には、書き損じではない、清書したはずの決意があった。頭の中では、何十回も練習した言葉があった。

――私には、他に好きな人ができた。島の暮らしに疲れた。本土へ戻りたい。

どの嘘も、練習の段階で崩れた。冬花は嘘が下手で、湊大はそれを見抜く男だった。結局、彼女が用意できたのは、嘘を混ぜない、けれど核心を伏せた言い方だった。

「冬花」

声がして、振り返ると湊大が立っていた。私服の彼は、制服のときより少しだけ若く見えた。グレーのセーターに、使い込んだコート。二年経っても、冬花の胸はこの男の姿に素直に反応した。そのことが、残酷だった。

「寒くないか」

「うん、大丈夫」

湊大は隣に座った。二人の間に、缶コーヒーが一つ置かれた。冬花の好きな、微糖のやつだった。最後にすることになるかもしれない会話の前に、彼は彼女の好きなコーヒーを買ってきた。そういう男だった。だからこそ、言いにくかった。

長い沈黙の末に、冬花は口を開いた。

「湊大。私たち、終わりにしよう」

海では、遠くで鳥が鳴いた。湊大は、すぐに返事をしなかった。缶コーヒーを一口飲んで、海を見た。

「……理由は」

「理由は……私の問題。湊大は何も悪くない。本当に、何も」

「それじゃ理由になってねえ」

「ごめん。でも、これ以上は言えない」

冬花は俯いた。爪が、自分の掌に食い込んだ。

「私と一緒にいると、湊大は、大事なものをなくす。だから――」

「大事なもの、って何だ」

初めて、湊大の声に棘があった。冬花は顔を上げた。彼は海を見たままだった。顎の筋肉が、硬く張っていた。

「それを、お前が決めるのか。俺の大事なものは、俺が決めることじゃねえの

か」

正論だった。まったく正しい言葉だった。だから冬花は、返す言葉を持たなかった。彼女の決意は、彼の未来のためという大義の形をしていたが、その実、彼の意思を一度も聞かずに下した、一方的な判決だった。冬花自身、それに気づいていなかったわけではない。気づいていて、なお、他に方法を知らなかったのだ。

「ごめんなさい」

「謝るな。……分かった」

湊大は立ち上がった。冬花も慌てて立った。

「分かった、って」

「お前が決めたなら、俺は引き下がる。理由も聞かない。……今まで、ありがとうな」

あっけないほどの幕引きだった。冬花は、彼が引き止めてくれることを、心のどこかで期待していた自分に気づいて、愕然とした。身勝手だった。自分で切り出しておいて、止めてほしかったのだ。

「湊大……」

彼はもう歩き出していた。港の桟橋を、本土へ向けてではなく、船へ向けて。一歩、また一歩。あの大きな背中が、冬の光の中で遠ざかっていく。冬花は追いかけなかった。追いかける資格がないと思った。ベンチに残された缶コーヒーは、まだ温かかった。

その夜から、二人の関係は

「終わった」

ことになった。島は狭い。翌日からも、冬花は港でフェリーを見たし、湊大も病棟の前を通っただろう。だが二人は、目が合っても会釈だけをして、言

葉を交わさなかった。島の人間たちは異変にすぐ気づいた。けれど誰も、二人の前では何も聞かなかった。島の優しさは、干渉しないことの形も持っていた。

冬花は毎晩泣いた。泣きながら、これは正しい選択だと言い聞かせた。彼はいずれ、島か本土で、別の人と出会うだろう。子どもを持ち、父親になるだろう。その未来を想像すると胸が焼けるように痛んだが、その痛みこそが、自分の選択の代金だと思った。

手術まで、あと三十八日。

彼女はまだ知らなかった。引き下がった男が、その同じ夜に、何をしていたかを。

久世湊大は、嘘をつくのが下手な女を選んでしまった、と常々思っていた。

冬花が検査で本土へ渡った日。彼は病院に電話をしていないし、後をつけてもいない。ただ、島の診療所の所長と港で世間話をしたときに、所長の言葉の端に、引っかかるものがあったのだ。

「高梨さんは、よくやってくれてるよ。……あの子は、自分のことは後回しだからな」

それだけだった。それだけで、湊大の船乗りとしての勘が騒いだ。海の天気を読むように、彼は人の言葉の含みを読む男だった。冬花の上ずった声、帰島した日の顔色、夜中にスマートフォンを見る横顔。

そして何より、あの夜、彼女が泣きながら求めてきたこと。

別れを切り出された日、港で引き下がったのは、諦めたからではなかった。彼は知っていたのだ。ほぼ全てを。冬花が本土の病院で何を告げられたか、正確な病名までは知らない。だが

「自分の体のことで、湊大に負担をかけたくないと考えている」

という核心は、彼女の言葉の選び方と、彼女が伏せた部分の形から、ほぼ正確に読み取れていた。

ではなぜ、引き下がったのか。

冬花という女は、追えば逃げる。正面から

「全部知ってる」

と言えば、彼女は屈辱と申し訳なさで、もっと頑なになる。彼女が

「自分で決めた」

と言い張れる形を崩してしまえば、彼女の誇りまで奪うことになる。湊大にできたのは、彼女の決断を一度受け取ったふりをして、その決断が彼女自身の手で書き換えられる日まで、水面下で全部を整えておくことだった。

自己犠牲という言葉は、湊大は嫌いだった。自分がしていることは犠牲ではない、と思っていた。単に、自分の女が困っているときに、男がやるべきことをやっているだけだ、と。

その夜から、湊大の裏側の生活が始まった。

まず、本土の病院へ行き、冬花の担当ではない相談窓口で、手術前後の付き添いの制度、家族向けの宿泊施設、島からの通院の現実的な手段を聞いた。

「家族ではない」

と言えば断られる場面もあったが、彼は粘った。次に、勤務先の運航会社へ、来年度の勤務形態について相談した。手術の時期に長期の休みが取れる

か。さらに、その先。付き添いと療養が長引くなら、船長職を辞し、本土側の陸上勤務へ移ることは可能か。

陸上勤務。それは、十五年続けた船の生活を終わらせることだった。外洋への夢を蹴って島に残った男が、今度は島の船そのものを降りる。その覚悟を、湊大は誰にも言わなかった。冬花に知られれば、彼女は絶対に止める。止めさせるための情報は、与えない。それが彼のやり方だった。

休みの日、湊大は船の船橋に一人でいた。誰もいない船橋で、彼は主鍵——エンジンをかけるための、船の鍵を布で磨いた。磨く必要など、とうにないほど手入れの行き届いた鍵だった。それでも彼は磨いた。習慣だった。緊張すると、船乗りは手を動かす。

「……生きて帰ってこいよ」

鍵に話しかけるなど、笑い話にもならない。だが湊大は真剣だった。この

船で冬花を本土の病院へ送り、この船で迎えに行く。その日まで、この鍵は俺の手の中にある。

島の人間の中で、ただ一人だけ、事情に感づいた者がいた。病棟の看護師長だった。彼女は湊大を診療所の裏へ呼び出し、短く言った。

「船長。あんた、知ってるんだね」

「……何のことですか」

「とぼけなくていい。あの子は、あんたにだけは言えないんだよ。……あんたが引き下がったふりをしてるのは、あの子のためかい」

「……引き下がったつもりは、端からねえです」

看護師長は、深く息を吐いた。

「なら、一つだけ頼む。あの子が自分から言い出す日まで、あんたは何も知らないふりを続けなさい。あの子は、自分の足で戻ってくる子だよ。引っ張っ

ちゃいけない」

「分かってます」

「それと、船長。あんたも、一人で抱えるんじゃないよ」

湊大は答えなかった。一人で抱えるのが、自分の性分だったから。

その頃、表側の生活では、二人は他人に戻っていた。本土から商品を届ける業者への対応で、湊大は港で冬花とすれ違った。冬花は、病棟の子どもを連れて、散歩の途中だった。子どもが湊大に手を振った。冬花は一瞬、昔の癖で微笑みかけ、すぐに他人への微笑みに直した。その直し方のぎこちなさが、湊大には何よりの答えだった。気持ちは、まだそこにあった。気持ちがあるからこそ、彼女は逃げている。

夜、湊大は一人で飲んだ。島の小さな居酒屋ではなく、自宅で、静かに。グラスを置いて、彼はスマートフォンの画面を開いた。冬花との最後のやり取

りは、別れ話の前日の他愛ないものだった。
『明日の夜勤、寒いからカイロ持っていけよ』
『持った！　ありがとう』
それ以降、送信ボタンは押されていない文章が、下書きにいくつも溜まっていった。
『飯食ってるか』――送らない。
『無理すんな』――送らない。
『俺はまだ』――打ちかけて、消した。
男の未練を、文面に残す趣味はなかった。だがその夜だけ、彼は別のことをした。冬花の宿舎のポストに、無記名で、本土の病院の近くの宿泊施設のパンフレットと、島の人間が代わる代わる病棟を手伝うシフト表のコピーを入れたのだ。シフト表は、看護師長と組んで作ったものだった。冬花が入

院しても、病棟は回る。子どもたちも待っている。その事実だけを、彼女に届けたかった。誰からとも分からない形で。

ポストの前で、湊大は少しだけ立ち止まった。ノックをすれば、冬花は出てくるだろう。出てきて、泣くだろう。そうなれば、彼女の

「自分で決めた形」

は崩れる。

彼はノックをせずに帰った。冬の星が、やけに近く見える夜だった。

手術まで、あと三十日。

冬花のポストに、差出人のない封筒が入っていたのは、月曜日の朝だった。

中には、本土の病院の近くにある付き添い者向け宿泊施設のパンフレットと、病棟のシフト表のコピーが入っていた。シフト表には、冬花の入院期間にあたる日々に、島のボランティアや他の保育士、看護助手たちの名前が、びっしりと書き込まれていた。自分の空白を、誰かが先回りして埋めてくれている。その事実に、冬花は宿舎の玄関で立ち尽くした。

誰が入れたのか。看護師長か、本土の友人か。それとも――。

思い浮かんだ顔を、冬花は慌てて打ち消した。湊大であるはずがな

い。彼は引き下がった。理由も聞かずに。それなのに、こんな回りくどい優しさだけを残すはずがない。そう自分に言い聞かせても、心臓は正直だった。

その日から、冬花は妙なものに気づき始めた。

病棟の子どもたちが、冬花の体調を気遣うようになったこと。

「ふゆ先生、座って絵本読んで」。

誰かに教わったような気遣いだった。本土の病院から、入院の案内の電話が来たとき、担当者が言った言葉。

「付き添いの方のご相談は、先日伺いましたので」。

先日。誰が相談に行ったのか、冬花は聞けなかった。聞けば、答えが返ってくる気がしたから。

そして何より、港のフェリーだった。

冬花は、散歩の時間に子どもたちと港へ行くことがあった。遠くから見る

フェリーの船橋。ガラスの向こうの人影が、湊大だと分かった。彼は、船の鍵を磨いていた。出航前でもない、休憩の時間に。一度だけでなく、何度も。子どもが言った。

「船長さん、いつもあれ磨いてるね。ピカピカだね」

冬花は、その光景をうまく処理できなかった。磨く必要のないものを、人はなぜ磨くのか。不安だからだ。祈る代わりに、手を動かしているのだ。冬花はそれを知っていた。二年も一緒にいれば、相手の不安の形くらい分かる。

知らないふりをしているのは、どちらなのか。

夜、冬花は引き出しを開けた。手術の説明書。その下の、書き損じの手紙たち。一番上の、涙で滲んだ一通を、彼女は読み返した。『あなたの未来を、私に使わないで』。この一行は、今も正しいと思っていた。思っていたが、その一行の裏側にある自分の気持ちを、冬花は初めて直視した。

使わないでほしいのではない。本当は、使ってほしかった。彼の未来ごと、私を選んでほしかった。選んだ結果、彼が何かを失うとしても、それでも私がいいと、彼自身の口から言ってほしかった。それは身勝手で、酷い願いだった。だから封をした。彼の未来のため、という綺麗な理由で封をした。

「……私、卑怯だ」

声に出すと、涙が出た。湊大に全てを話すことは、彼に選択を委ねることだった。委ねれば、彼は間違いなく冬花を選ぶ。そして何かを失う。その損失の責任を、冬花は背負いたくなかったのだ。背負うのが怖くて、先に逃げた。彼のためを装って、自分を守っていた。

その認識は、冬花を一晩中眠らせなかった。

朝、目の下に隈を作って病棟へ行くと、看護師長が言った。

「ふゆちゃん。あんた、そろそろじゃないの」

「……何がですか」
「意地の張り合い。あんたも、船長も」
冬花は、持っていた絵本を取り落としそうになった。
「師長、知って……」
「島の人間はね、大抵のことは知ってて、知らないふりをするの。あんたたちが、それぞれ勝手に苦しんでるのも含めてね」
看護師長は、冬花の肩に手を置いた。その手は温かかった。
「言いなさい。言って、相手に選ばせなさい。それが、あんたの言う『対等』ってやつじゃないの。……それと、一つだけ教えとく。船長はね、あんたの入院の間、毎日本土へ渡るつもりでいるよ。船を降りてでもね」
冬花は息を呑んだ。
「船を、降りる……？」

「それ以上は、あんたが本人に聞きなさい」

病棟の窓から、港が見えた。昼便のフェリーが、静かに桟橋を離れていくところだった。その船橋に立つ男の姿を、冬花は涙で滲ませながら見送った。

手術まで、あと二十一日。

残された時間で、私は何を選び直せるだろう。その問いが、初めて冬花の中で

「逃げるための期限」

ではなく

「戻るための期限」

に変わり始めていた。

きっかけは、一枚の絵だった。

病棟で長く入院している子どもたちが、島の風景を描く小さな展示を、診療所の待合室で開くことになった。冬花はその準備に追われていた。画用紙を貼り、タイトルカードを書き、子どもたちの言葉を添える。忙しさはありがたかった。考える時間が減るから。

展示の前日、五歳の男の子が、冬花に一枚の絵を差し出した。フェリーの絵だった。青い海、白い船。船の窓にはいくつもの笑顔。そして船橋の横に、小さく、二人の人影が描かれていた。一人は大きくて、一人はマフラーをしていた。

「これは誰？」

「船長さんと、ふゆ先生。船長さんね、このあいだ来たとき、言ってたよ。『ふゆ先生が帰ってくるまで、この船は病院と島をつないでるんだ』って」

冬花の手が止まった。

「……船長さん、そんなこと言ってたの」

「うん。あとね、『ふゆ先生がいない間は、僕たちがいい子にしてるんだよ』って、約束したの」

子どもは無邪気に笑った。冬花は、その絵を両手で受け取って、長い間見つめていた。

帰ってくるまで。その言葉には、冬花が帰ってくることが前提として含まれていた。湊大は、島の子どもたちにまで、冬花の帰還を約束していたのだ。彼女が別れを告げ、彼が引き下がった、その後の世界でも、彼は冬花の席を空けて待っていた。病棟のシフト表も、宿泊施設のパンフレットも、そして

この絵も。全てが同じ方向を向いていた。

冬花はその夜、久しぶりに自分から湊大へ連絡をした。電話ではなかった。短いメッセージだった。

『日曜、港に来られますか。話がしたいです』

返信は、すぐに来た。

『行く』

たった二文字だった。その二文字を、冬花は何度も読み返した。責める言葉も、期待させる言葉もなかった。ただ

「行く」。

彼はいつもそうだった。言葉は少なく、行動は速い。その二文字の向こうに、二年間積み重ねた彼の全部があった。

日曜日。港のベンチは、別れ話をしたあの場所だった。同じ場所で、今度は

本当の話をしようと、冬花は決めていた。手術のこと。体のこと。子どもが持てない可能性が高いこと。そして、自分が逃げた本当の理由。それらを全部、彼に渡して、彼に選んでもらう。それがどんなに怖くても、それが対等ということだった。

当日、島は冷たい雨だった。

冬花は傘もささずにベンチで待った——のではない。湊大が先に来ていて、大きな傘を差し、彼女の分のタオルまで持って立っていた。彼は冬花の濡れた肩を見て、眉を寄せた。

「傘は」

「……忘れた」

「まったく」

文句を言いながら、彼はタオルを冬花の頭に被せ、乱暴なようで実は優し

い手つきで水気を拭った。その手の温かさに、冬花の決意は半分溶けて、涙に変わりそうになった。だが今日は、泣く前に言う日だった。

「湊大。全部、話す。……私の体はね」

雨音の中で、冬花は話した。幼い頃の治療のこと。癒着のこと。嚢腫のこと。四十九日後に予定されていた手術が、あと十八日後に迫っていること。右の卵巣を摘出すること。子どもを、自然に持つことはたぶんできないこと。

湊大は、一言も遮らずに聞いた。雨が傘を打つ音だけが、二人の周りにあった。

「別れようって言ったのは、湊大に、それを背負わせたくなかったから。湊大は絶対『構わない』って言う。言って、ずっと諦め続ける。……それが嫌だった。嫌だったけど、本当は――」

冬花の声が詰まった。湊大は、まだ何も言わなかった。急かさなかった。そ

の沈黙が、最後の一押しになった。

「本当は、選んでほしかった。全部知ったうえで、それでも私がいいって、湊大に言ってほしかった。私、湊大の未来のためなんて言って、自分が傷つきたくなくて逃げただけ。……ごめんなさい。ごめんね、湊大」

雨の中、冬花は泣いた。声を上げて、子どものように泣いた。湊大の傘が傾ぎ、二人を雨から守る範囲が狭くなっても、彼は動かなかった。やがて、泣きじゃくる冬花の肩に、大きな手が置かれた。

「……話してくれて、ありがとうな」

最初に言ったのが、それだった。責める言葉でも、同情でもなかった。

「一つだけ、怒っていいか」

「……うん」

「俺を、そんなに信用できなかったのか。お前の全部を知って、それでも選ぶっ

ていう当たり前のことを、俺ができない男だと思ってたのか」
　冬花は顔を上げた。湊大の目も、赤かった。三十五歳の船長は、雨の中で、静かに泣いていた。それを見たのは、二年で初めてだった。
「違う、違うの、湊大が悪いんじゃ――」
「分かってる。お前が優しすぎたんだ。優しすぎて、一人で全部決めた。……冬花、俺は怒ってる。でも、それ以上に、お前が戻ってきてくれて、嬉しい」
　彼は傘を冬花の側へ大きく傾けた。自分の肩が雨に濡れるのも構わずに。
「続きは、濡れない場所で話そう。全部、聞く。手術のことも、その先のことも。……それから、俺の話も聞け。お前に隠してたことが、俺にもある」
　港の雨は、まだ止んでいなかった。だが冬花は、十八日という期限の向こうに、初めて
「手術の、その先」

の景色を思い描くことができた気がした。

その夜、二人は別々の家に帰った。何もかもが元どおりになったわけではない。けれど、冬花の引き出しの中の書き損じの手紙は、その夜、一通だけ、破って捨てられた。渡す必要のなくなった手紙が、ようやく一通、消えた。

湊大の

「隠していたこと」

は、翌日の夜、彼の家で明かされた。

テーブルの上に、書類が並べられた。本土の病院近くにある付き添い者向け宿泊施設の予約確認書。運航会社の人事担当との面談のメモ。来年度の勤務形態についての相談記録。そして、一番下に、陸上勤務への異動願い——下書きのまま、まだ提出されていない一枚。

「冬花が入院する間、俺は毎日、本土へ渡る。船の時間に合わせれば、面会時間には間に合う。手術の日は、休みを取った」

「湊大、これ……」

「それと、その先の話だ。お前の療養が長引くなら、俺は船を降りる。本土の営業所の陸上勤務に移れば、病院にも近いし、お前の通院にも付き合える。異動願いは、お前が今日、話してくれなかったら、このまま出してた」

冬花は、言葉を失った。

「だめ」

絞り出した声は、震えていた。

「だめだよ、湊大。船は、あんたの人生でしょ。外洋の夢を諦めてまで島に残って、今度は船そのものを降りるなんて。私のために、そこまで――」

「冬花」

「私、そんなつもりじゃ……。私が戻ってきたのは、湊大に選んでほしかったからで、湊大の人生を奪うためじゃ――」

「冬花。落ち着け」

大きな手が、冬花の両手を包んだ。テーブルの書類が、少しだけ揺れた。

「いいか、よく聞け。俺は、お前のためだけに船を降りるんじゃない。俺は、三十五だ。船長として海に出続ける人生も悪くない。だが、陸に上がって、誰かと暮らしていく人生を、俺はお前と出会ってから、ずっと考えてきた。船を降りる時期は、いずれ来る。理由がお前だってだけだ。理由がある男は、迷わない」

冬花の目から、涙が零れた。止めようとして零れた涙だった。

「奪うんじゃない、お前は。俺が、自分で選んでる。……ほら、お前が言った対等のやつだ。お前だけが決めるのも、お前だけが我慢するのも、対等じゃない。俺にも、選ばせろ」

その言葉は、第4章で冬花自身が突きつけられた正論の、裏返しだった。自分の未来は自分で決める。湊大も、それを言っていたのだ。

「……私が泣くと、湊大はずるいこと言う」
「泣かせようとして言ってねえよ」
彼は冬花の涙を、親指で拭った。船乗りの、節くれだった親指だった。その粗い指の腹の感触が、冬花には何より彼らしかった。
話は、それから深夜まで続いた。手術の日程、入院の荷物、病棟の子どもたちへの伝え方、実家への連絡。冬花の両親は本土に住んでいて、手術には駆けつけることになっていた。湊大は、両親への挨拶も
「手術の前に、きちんとする」
と言った。冬花は驚いた。
「挨拶って……」
「お前と、この先も一緒にいる男としてだ。順番が逆になっちまったが、やることはやる」

結婚、という単語は、まだどちらも口にしなかった。手術という大きな関門の前で、その単語を軽く扱いたくなかったのだ。だが、その単語が二人の間にあることは、もう疑いようがなかった。

話が一段落した頃、時刻は零時を回っていた。外は雨上がりで、月が出ていた。

「今日は、帰るのか」

湊大が聞いた。引き止める調子ではなかった。確認するだけの声だった。

冬花は、コートに手を伸ばしかけて、止めた。

「……帰りたくない」

自分の声が、自分でも驚くほど素直だった。

「帰りたくない。明日も明後日も、手術の日まで、本当はずっと一緒にいたい。……いい？」

湊大は、しばらく冬花を見ていた。その視線が、少しずつ熱を帯びていくのを、冬花は肌で感じた。彼は立ち上がり、冬花の前に膝をついた。目線が同じ高さになる。

「冬花、確認する。俺は今、お前に触りたい。我慢してた分、たぶん、優しくできない」

「……うん」

「嫌なことがあったら、その場で言え」

「うん。……私も、言いたいことがある」

冬花は、震える手で彼のシャツの胸元を掴んだ。

「私も、湊大に触りたい。別れてる間、ずっと……ずっと、湊大の夢を見てた。隣にいないのが、こんなに寒いなんて知らなかった。……だから今日は、私を、置いていかないで。最後まで、一緒にいて」

彼の喉が、大きく鳴った。次の瞬間、冬花は抱き上げられていた。三十五歳の船長の腕は、彼女の体重など物の数ではなかった。ベッドルームへ運ばれながら、冬花は彼の首にしがみついて、耳元で囁いた。

「好き。大好き。……大好きだよ、湊大」

ベッドに下ろされ、彼の大きな体が覆い被さってきた。キスの深さが、いつもと違った。我慢していた人間のキスだった。舌が絡み、呼吸が乱れ、冬花の手は彼の背中をまさぐって、シャツ越しの筋肉の熱を確かめた。湊大の手は、冬花のブラウスのボタンを外しながら、何度も止まった。そのたびに、彼は冬花の目を見た。先へ進めていいか、その都度確かめる目だった。その確かめ方が、冬花の胸を締め付け、そして熱くした。

求められている。彼が、自分をこんなにも欲しがっている。

シャツが落ち、彼の裸の胸に冬花の手のひらが触れた。心臓が、手に負え

ないほど速く打っていた。
「船長さん、心臓、うるさい」
「……お前のせいだ」
彼は冬花の首筋へ顔を埋め、肌を吸った。跡が残るほど強く。冬花は痛みと快感の境目で声を漏らし、彼の短い髪を掴んだ。ブラジャーのホックが外され、露わになった胸を、彼の大きな手が包んだ。手のひらの熱さと、指先の確かな動き。乳首を指の腹で転がされるたび、冬花の腰は勝手に震えた。
「あっ……湊大、もう……」
「もう、なんだ」
「……待てない。早く、湊大を感じたい」
その言葉で、彼の自制の糸が切れる音がした気がした。スカートが捲られ、下着が脚を伝って落ちた。彼の指が冬花の秘部へ触れたとき、彼女はとっく

に濡れていた。指の腹が花芯を撫で、内側へゆっくりと侵入してくる感触に、冬花は彼の腕に爪を立てた。

「濡れてる。……こんなに」

「言わないで……恥ずかしい」

「俺を待ってた体だ。恥ずかしくねえ」

彼の言葉は、紋切り型ではなかった。一つ一つが、冬花だけに向けられた、彼固有の乱暴で不器用な愛情だった。指の動きが速くなり、冬花の呼吸は短く乱れた。達しそうになるたび、彼はわざと指を止め、冬花の目を見た。

「欲しいと言え」

と目が言っていた。

「湊大……お願い、もう、中に……」

彼は自分の衣服を乱暴に脱ぎ捨てた。露わになった欲望は、冬花の言葉に

雄々しく応えていた。湊大は冬花の脚を開かせ、自分の腰をその間へ進めた。先端が入り口に触れた瞬間、二人とも息を止めた。

「入れるぞ」

「うん……来て」

深く、一つになった。冬花は声を上げて彼の背中を抱いた。別れていた時間の分だけ、体は互いを覚えていて、そして飢えていた。湊大の動きは最初から激しかった。我慢していた分、という彼の言葉どおりだった。冬花の内側を深く抉るたび、彼女の声は高くなり、ベッドが軋んだ。

「冬花……冬花」

「あっ、あ……湊大、好き、好き……」

名前を呼び合いながら、二人は貪るように求め合った。湊大は冬花の腰を持ち上げ、角度を変えてさらに深く入り込んだ。彼女の中で彼を締め付ける

力が強くなるたび、彼の喉から低い声が漏れた。快感は波のように押し寄せ、冬花は先に限界を迎えた。体が大きく震え、内側が痙攣するように彼を締め付けた。その締め付けに、湊大も続いた。冬花の耳元で名前を呼び、深く、深く、彼は彼女の中で果てた。

しばらく、二人は重なったまま微動だにしなかった。やがて湊大は体をずらし、けれど離れずに、冬花を横から抱き込んだ。汗ばんだ肌が密着する。

「……大丈夫か。無茶した」

「大丈夫。……大好き」

冬花は彼の胸に額を押し付けた。事後の静けさの中で、彼の手が彼女の背中をゆっくりと撫で続けた。愛撫の続きではなく、労りの手だった。

「冬花。手術は、俺も一緒に行く」

「うん」

「終わったら、また、こうやって抱く」
「……うん」
「だから、約束だ」
冬花は目を閉じた。この体温と、この腕と、この約束を抱えて、手術台に上がろうと思った。逃げていた頃には無かった覚悟が、体の芯に据わっていた。
手術まで、あと十七日。その日から、数え方は変わった。終わりへのカウントダウンではなく、約束へのカウントダウンとして。

手術までの十七日間は、後から思い返すと、冬花の人生で最も濃密な十七日間だった。

二人は、失われた一か月を取り戻すように、毎日を一緒に過ごした。とはいえ、特別なことは何もなかった。湊大は朝の始発に乗り、冬花は病棟へ出た。昼休みに港で顔を合わせ、夕方、買い物をして、どちらかの部屋で夕食を作った。平凡な日々。だが、その平凡さの一つ一つが、冬花には宝物に思えた。当たり前だと思っていた日常は、当たり前ではなかったのだと、この冬に学んだ。

入院の準備は、湊大が率先して進めた。パジャマ、下着、洗面道具、暇つぶしの本。冬花が

「そこまでしなくても」
と笑うと、彼は
「俺の方が落ち着くんだ」
と言った。船乗りの彼は、準備の男だった。出航前の点検のように、入院の荷物を何度も確認した。
病棟の子どもたちへの伝え方も決まった。
「ふゆ先生は、ちょっと体を治しに、本土のおっきい病院へ行ってきます。春には戻ってきます」。
子どもたちからは、折り紙の千羽鶴ならぬ、色とりどりのフェリーの折り紙が贈られた。船の折り紙を百隻。冬花は、その箱を入院の荷物の一番上に載せた。
湊大の口から、陸上勤務の話が正式に出たのは、手術まであと九日の夜だっ

た。

「異動願い、今日、出してきた」

冬花は箸を止めた。

「……手術の結果を見てからでも、遅くなかったのに」

「結果がどうであれ、俺の答えは同じだ。だったら、早い方がいい」

彼は穏やかに言った。犠牲の重さを、相手に感じさせない男の穏やかさだった。

「四月から、本土の営業所勤務になる。船長は、若いのに譲る。……冬花、俺は後悔してない。するなよ、お前も。俺の人生は、俺が選んだ。お前は責任を感じるな。ただ、お前の隣にいることを選んだ男として、扱ってくれればいい」

冬花は、夕食の煮物の湯気の向こうで、泣き笑いの顔になった。

「分かった。……ありがとうじゃなくて、よろしく、って言う」

「ああ。それでいい」

その夜、冬花は自分の側からも、一つの

「選び直し」

を彼に手渡した。書き損じではない、清書した手紙だった。便箋二枚。手術への不安、彼への感謝、そして術後の自分の体とどう向き合うつもりか。最後の一行には、こう書いた。

『私は、湊大と生きる方を選びます。手術の結果がどうなっても、逃げないで、湊大と一緒に決めていきます』

湊大は手紙を二度読んだ。それから、無言で冬花を抱き締めた。手紙は、彼の本棚の、絵本の隣に大切に仕舞われた。

その夜の二人は、激しくではなく、深く求め合った。入院が近づき、冬花の体調管理のためにも、彼は抑えを効かせた。それでも、キスの回数は増えた。

触れ合う時間は長くなった。彼は冬花の体を、手術の痕が残るであろう場所ごと、丁寧に愛撫した。腹へ、腰へ、唇を落としていくその所作は、

「どこがどうなっても、お前がいい」

という無言の表明だった。冬花は、その唇の移動を感じながら、何度も目を潤ませ、何度も彼を抱き返した。

「湊大、私の体、手術で変わっちゃうよ」

「変わるのは形だけだ。お前はお前だ」

「……子どもも、たぶん」

「冬花。俺が欲しいのは、お前だ。お前と暮らす日々だ。それ以外は、全部、二人で考えることだ。考えることを、放棄すんな。俺も放棄しない」

冬花は彼の腕の中で頷いた。頷きながら、もう逃げない、と心の中で繰り返した。

入院は、手術の三日前だった。本土の病院へ渡る朝、港には見送りの人が集まった。看護師長、病棟のスタッフ、休みだった船の乗組員たち。冬花は笑顔で手を振り、フェリーに乗り込んだ。その船の船長は、湊大だった。

「本日はご乗船、ありがとうございます」

船内アナウンスの声が、いつもより少しだけ震えていたのを、島の人間は全員聞き取っていただろう。冬花は客室の窓側に座り、離れていく島を見ていた。島は小さくなっていくが、消えはしなかった。帰る場所は、確かにそこにあった。

本土の港に着くと、湊大は制服のまま、冬花の荷物を持ってタラップを下りた。その日、彼はもう船には戻らなかった。交代の船長へ、丁寧に引き継ぎを済ませていたのだ。船橋を譲る彼の横顔を、冬花は目に焼き付けた。

鍵の引き継ぎも、そこで行われた。若い副船長に、磨き上げられた主鍵が

手渡された。湊大の手が、一瞬だけ鍵の上で止まった。十五年、毎朝握ってきた鍵だった。副船長は深く頭を下げた。

「船長、行ってらっしゃい」

「……ああ。船を頼む」

冬花は、その光景を見て泣いた。彼は、こうやって一つずつ、自分の人生を畳んで、冬花の隣へ並べ直していた。犠牲という言葉では軽すぎる、静かな決断の積み重ねだった。

「湊大、鍵……」
「大丈夫だ。鍵は譲ったが、海は逃げねえ」
彼は笑って、冬花の荷物の取っ手を握り直した。
「行こう。病院へ」
手術まで、あと三日。泣いて、笑って、選び直した日々が、その三日へ収束していく。

さよならを言う前に、もう一度だけ抱いて。

著者　碧汐

二〇二六年十一月八日

本作品はＡＩ一部利用です。制作工程の一部にＡＩを使用しています